

三つの地区集會の記

— それぞれ意義ふかい研修成果を —

(一) 下直見の現地研修

去る六月二十八日(土曜)午後、直川村下直見地区の
現地研修を急に計画した。地元から山下貞男氏、体石博
美氏、高瀬水一郎氏、曾宮衛吉氏の四名、本会からは高
木、羽柴、清田と、合せて七名であった。

幸い長老橋迫大伴氏も案内下さって、両方りの墓地を
しらべる。墓地の中央に「慶長六年十一月廿二日 法
名釋道桑元 俗名曾宮喜左卫門」とある墓碑があつ
た。但しこの墓は、文化五年に建て替えたものであるこ
とを、その一面に示して置いている。この曾宮喜左卫門と
いう方は、どんな人であつたか。曾宮姓の元祖という。
谷川をへだてた向うの山裾に「樞題屋敷」と呼ばれる
広い畑がある。南に向つて開け、谷川の流化は近く、し
かすや山で越えれば本匠村の小川部落が近い、という。
しかし、この二分所は今の水口の曾宮、高瀬兩氏祖にか
かあるものであろうが、どちらが先住者であつたか。残
念ながらこれだけでははつきりしない。
水口から下つて棚井田の荒廢した庵を訪ねる。おな無
戒といった姿、建物は止むと得ないとして、全く藪の
中に埋もれている。寛政四年の造立になる「大衆妙典一石
一字塔(日帯当年登岸の文字あり)」と、等身大の地藏立像、
それに加えて一石彫上輪塔。三つともなかなかの秀作で

ある。この部落の人達及なせ、こんな文化財を放つてあるのか。
道越では久留須川の淀々で臨んだ丘の上には、「天正七年卯二
月廿日 師忠中公禪定門」とある墓、羊子から推して天正六年
十一月日向高城付近に於ける大友・島津の合戦に従軍、耳川の
敗戦に戦死した、この村出身の武士の墓であるうとのこと。(体
石氏の見解)なるほどと思つた。

江川内、谷バキの「庚申塔」は壯觀であつた。折を見て構查
したいと思つている。

以下、曾宮家でかなり時間をかけて、見聞したことに就いて
の研究・討議。曾宮氏愛蔵の羽石秋室、山岡鉄舟、米庵の書也、
教幅の絵など拝見。おきてなうまでうけて、収穫多い研修の半日
であつた。

(二) 上小倉益田家の訪問集會

七月十二日(土曜)の午後、今度は弥生町上小倉の益田顧問
宛、名付けはは訪問集會である。

先生のご不健康がゆゑ、以前のようには現地調査など殆ん
ど出来ず、弥生の連中は文化財現地研修の状況報告を分ね、一
回欠し振りば先生のお話を伺おうという寸法であつた。夫人も
殆んど同席下さつての歓迎は、恐入るばかりであつた。

弥生町の文化財調査委員連中の肥前名護屋城の話は、まず面
白かつた。太閤秀吉が二十万の大軍と朝鮮に送り、ここから皆
揮した豪勢さが、ほんらんなる屏風絵でうかがえて、なる程ま
やとうなづけた。

益田先生は、櫻野の古墓地、漢竹の藪の中に残る五輪塔数基
を、佐伯氏歴代の墓塔に相違ないとして、くわしい推論をなさ
る。ここは史談会として、これまで再三度辰と運んで研習し
ているが、しかし私共は佐伯氏一族の方の、有力な誰かの墓所
からいにか考えていなかつた。歴代、つまり代々の佐伯氏の
ということになると、何かによつて一々誰の墓、誰の塔とい

おけにはいかぬものか。いずれにせよ佐伯氏初代惟庸から、九代惟世に至る九代のうちで、年代は中世、室町時代中期以前、さかの風は鎌倉時代末期ということになる。五輪塔の刻文そのものも重厚、典雅、そんじょこらにあるものの比ではない。

夫人からは、十年ほど前に建てられた一石一字塔に納めた経文浄書のお話をきき、つくづく思った。昔の人は報求及始の念が厚く、現世安穩後世安樂を願って、造塔にひとめていた。明治・大正・昭和とこのごろは願徳碑も記念碑こそ多いが、神仏に祈誓しての塔碑の類は、殆んど造営されていない。懐仰心はどうなつたのか。

この日の出席は、高木・羽柴・清田、他元から古藤田泥谷・小野の合せて六名。益田家のご迷惑を考えて人数をしのびつたわけで、会員皆さんにはお報せしなかつた。ご諒承を乞う。

(三) 大賀家の美談をたたえて

今一つの日は、実日昨日(七月二十日、日曜)、小倉の大賀家が父々佐伯に來られ、黒沢に赴かれたこと、今日龍護寺参拝の由と承り、お会いしなくては高木会長、平田顧問、清田、羽柴、それに地元の米沢氏と五人がお寺に集まつた。

大賀家はこれつきとした大神姓佐伯氏の流れ、緒方惟栄の孫佐伯惟庸に及ぶまるその末裔で、昭和三十五年七月に物故された大賀善之進氏(行年八十才)にかあつて、今日は大当主幹子氏(善之進氏長女)と娘さんお二人であつた。まづ仏前読経の後、龍護寺と佐伯氏、それから毛利氏とのかがありと語り合い、それから庫裡でお茶をいだきながら懇談の時をもつた。

まづ、今秋十月佐賀県武生市で開かれる、民俗芸能大

会に青山黒沢富尾神社の神踊りと杖踊(県指定重要無形文化財)が、選ばれて大分県代表として出演することに決定した。

ところがこの出演には要する衣裳・装束のため、大賀幹子氏が、袴・松笠・舞扇など一揃、合せて十五着の大量を新規調製、神社に奉納されたという。まことに奇特なことである。さぞかし黒沢の人々は感激しておることである。私たちが、交々このことについてお礼を申し上げることを第一にした。

故人善之進氏が、佐伯氏の末流としてよく父祖の故地と慕い、とくに黒沢の富尾神社への寄進(大鳥居の神号前額・左七一対の高麗狗いずれも産金製)など、父祖及始の孝養のことなど、追憶の時をもつた。

龍護寺を香花院としながら佐伯氏の墓の少ないことから、裡野の墓塔(前掲)がそれではないかという話、大賀家が今立案中の龍護寺本堂の大修築について、積極的支援の考案のあつたこと、史談会の研修や活動に期待していることなど、話はとめどなく続いた。

おが史談会として、富尾神社の神踊・杖踊の佐賀大会への出演に対して、協力支援をすすめていと思つた。(文責 羽柴)



横門風櫓門

前号7ページ上段の図、上図のよう、扉の左右は石垣でなく、文字通り横門風でありました。(編集者のうっかりミス)

女おまへに上段に冠水門がありすが、現在はこの形式の門を冠水門と容赦してはいますが、正式には、これは御簾門であり、本来の冠水門は、雨柱の上の水を撒いたをたけ(下図右)の簡單な門で、永祿八年の「築城記」に、下図のように区別して記しています。(小野榮治)

